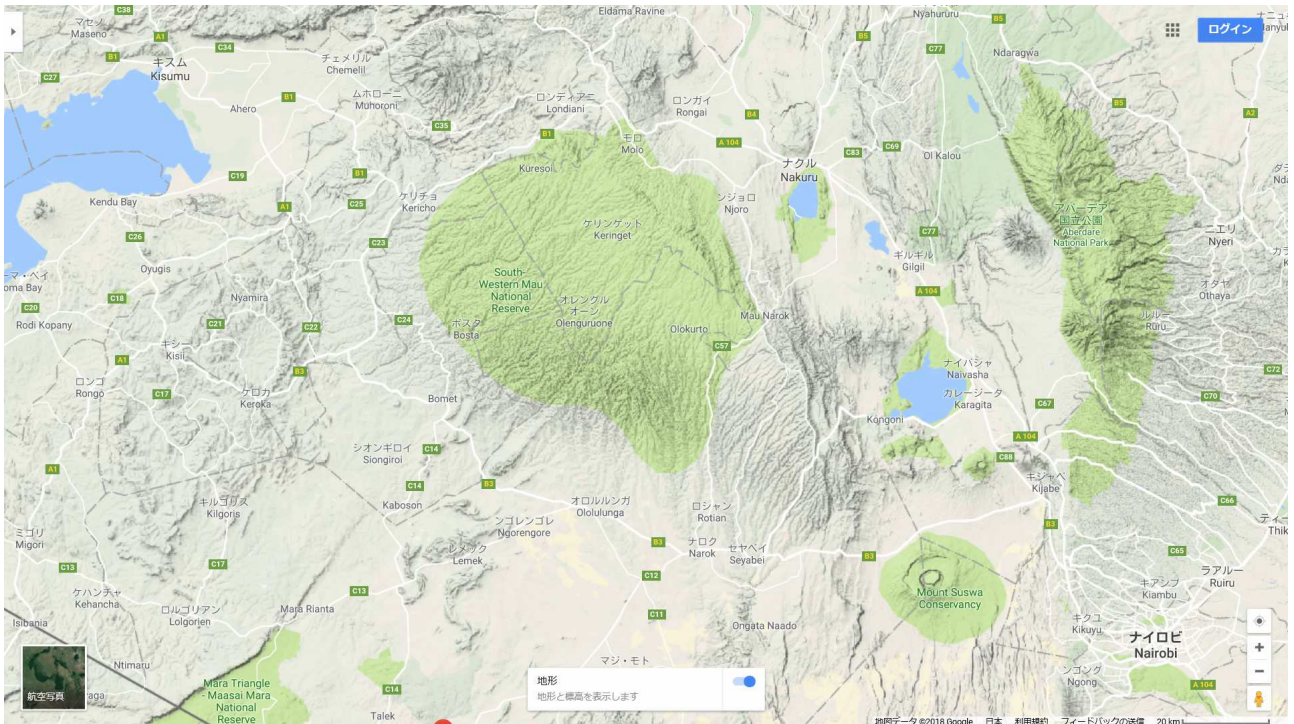


ヴィクトリア湖への道 to the lake Victoria

ケニア共和国

ケニア南西部の地図 右下にナイロビ、左上にキスム



東アフリカのケニアに出かけたのは、はるか昔、1987年の年末から88年の年始にかけてのことだった。いつもの様に、冬休みに入っすぐの12月26日に日本を発ち、香港そしてインドのボンベイ(ムンバイ)を経て首都のナイロビにあるジョモケニヤッタ国際空港に到着したのは、27日の昼頃だった。空港では友人の国連職員、O氏が車で出迎えてくれた。ナイロビは赤道直下とは言え、海拔1800mの高原にあり、しかも11月までの雨季が終わったところだった。聞いていたとおり吹く風は爽やかで、それが長旅の疲れをいやしてくれた。

ナイロビの街で

空港から出ると間もなく市街に入る。途中、象やキリンが群れ遊ぶナイロビ国立公園の前を通る。首都と隣り合わせに野生動物の住む場所がある所が、いかにも東アフリカらしい。昼飯がまだだと告げると、O氏は高層ビルも散在する市街地を抜け、スプリング・ヴァレーと言

う名の緑豊かな住宅地へと案内した。そこには、何かとお世話になっているというケニア人のジョンさんの家があり、今日はナイロビ在住の国連職員などを呼んでガーデンパーティーを催しているという。早速、そこにお邪魔した。ジョンさんの庭には、白黒黄色と肌の色がそれぞれ違う人々が、何の分け隔てもなく楽しそうに談笑していた。日本人の奥さんをもつジョンさんは中学の教師とかで、この国ではそれなりのエリートに属しているのだという。絶えず笑顔をふりまき見るからに気さくなジョンさ



ナイロビ国立公園 背景にナイロビ市街

んは、皆に私を紹介してくれた。長身の英国人の男性はすでにほろ酔い気分になっていて、私に野菜サラダを進める。そこに振りかけた赤い唐辛子を、名物の「ピリピリ」だと説明された。私も早速、アフリカ料理の一端を知ることになった。

その後で、ようやく当面の宿となる O 氏宅へと入った。途上国のこと、家にはお手伝いさんに加え夜間の警備員まで雇っていたが、その日は暇をもらっていて、こちらはすぐの対面とはならなかった。その晩、用意してあったケニア人の主食ウガリを食べた。これはメイズ(トウモロコシ)の粉を練って蒸したもので、あまりに淡泊なのでさすがに口にはあわなかった。O 氏との会話は日本や世界に散らばっている共通の友人の話題と長旅の体験談で、夜遅くまで続いた。

翌日は当面のケニア旅行のプランを立てるために、都心の旅行代理店・レンタカー会社を回った。大晦日からは、O 氏とキリマンジャロ山麓のアンボセリ国立公園に行く予定を組んだ。車とガイドを雇う必要があった。何軒か歩いた後で費用面で折り合ったので、日本人向けの代理店『道祖神(どうそじん)』で契約することにした。その時ビル内のトイレを借りたが、一々鍵を貸し出してもらい使用するという事情を知り、また一つ驚いた。年末の三日間の内一泊二日の予定で、単独でだがこの国の西の境をなすヴィクトリア湖へと行く計画を持っていた。往復 700 km の道程である。公共交通で安全かつ便利なものはないこの国では、自由旅行はレンタカーを借りるしか手がない。そこで安く貸してくれるところを探した。見つけたのは Avis や Hertz といった欧米系のそれではなく、地元資本のサヴァンナ・ツアーという会社だった。日長一日歩いてこうして段取りをつけた。夕方に O 氏の勤める UNHCR(難民高等弁務官事務所)のオフィスまで戻り、その車に乗って帰宅した。

ヴィクトリア湖への道

明けて 29 日。この日も乾季へと向かうナイロビの空は、すっかり晴れ上がり、気持ちの良い朝を迎えた。オフィスへ向かう O 氏と都心で別れると、例のサヴァンナ・ツアー前で担当の青年が車の鍵を渡してくれた。これから向かう道中のことを考えると、心が躍った。まだ涼気の残る都心を西方に向けて出発。その日は、夕方までにヴィクトリア湖畔のキスムの街まで行きつかなければならない。国道 A104 を北西に向け快調に飛ばした。都心から人家もまばらな郊外へと向かう区間は、分離帯付きの片側二車線と、やたらと立派な道が続く。これもまた途上国ならではの、諸外国の援助により完成したものだという。都心から別方向への道も、それぞれ援助国の資本が投入され、競うように立派だと言う。しかしこれも三十分もすると、舗装こそしてあるものの路肩のはっきりせぬ片側一車線の道となり、のどかな田園風景が広がって来る。道は狭くなったが往来はまばらであり、80 km 近い運転速度は落ちぬままとなった。



大地の裂け目である大地溝帯 ケニア付近

それからさらに 1 時間、前方の視野が急に開けたと思ったとたん、行く手の大地がぼっかりと陥没しており、それは左右にどこまでも広がっていた。アフリカ大陸を南北に縦断する大地溝帯(Great Rift Valley)の縁に出たのである。展望台があるので思わず立ち寄ると、大地の溝は 10 km 近くもあるのだろうか、遠くかなたに

再び立ち上がった大地の縁が見渡せた。それにしても、この景観のスケールの大きいこと！その大地の無辺の広がり、あらためて大陸に来たことを実感させた。この絶景に魅せられる観光客を当て込んでか、土産物屋が店を出している。今度はその店員と、赤や黄に彩られた民芸品の飾り物をめぐって駆け引きを楽しんだ。相手が800シリングというのをこちらは300と言、相手が600と言うのをこちらは400ならと返す。お互い微笑みながら最後は500で手締めとする。これがアフリカ流の買い方なのである。

さて、大地溝帯を降りると左手には長径15kmはある大きな湖、ナイヴァシャ湖が見えてくる。水上動物の見られる所と聞いていたので、クレセントと言う名の中の島を望むレイク・ナイヴァシャ・ロッジに寄ってみた。これも漆黒の肌をした若いホテルの従業員に聞くと、動物を見るため船を出せるが1時間単位だという。先を急ぐので30分でどうかと願ったところ、半額でOKとなり、早速小船をチャーターしてレイク・サファリと洒落込んだ。エンジン付きの小船がクレセント島周辺に近づくと、カバが勢い良く水浴びし、エジプト・アイビスが羽を休める光景と出会った。水が清くまた日差しが透明で、実に鮮やかな印象を受けた。棧橋に戻ってロッジ周辺を散策すると、目にまばゆいブーゲンビリアだのハイビスカスなどの美しい熱帯の花々が迎えてくれた。それは美しい場所だった。

先来た道を本道まで引き返す途中、ナイロビから遠くウガンダのカンパラをめざす鉄道の線路と交差する。その手前で道は牛たちの群れにふさがれ、私の運転する車はしばらく立往生を強いられた。牛追いの少年は満面に笑みを浮かべ白い歯を見せ、通り過ぎて行った。それは田舎でしか見られない、楽しい光景だった。ナイヴァシャの街を通り再び本道に出て、地溝帯上の一本道をひたすら北上する。沿道はサヴァンナ状の原野で、所々にアカシアの灌木が立っ

ていた。次のナクルの街に差し掛かった時、昼も過ぎていたので街中の食堂に入った。とにかく腹に入るものをと注文したら、出てきたのはぼそぼそしたスポンジ状のケーキだった。お茶は、アジアからアフリカまで普遍的に存在するチャイを注文した。世辞にもおいしいとは言えなかったが、こんな異世界で食事ができることが嬉しかった。

ケリチョーからキスムへ

ナクルから道は再び高度を上げていく。間もなく国道A104から別れて、ヴィクトリア湖畔のキスムへ向かう道に入った。緑がいつそう豊かになり、山間部の道を走ることになる。やがて、幾重にも茶畑が続く光景が両側に広がるようになった。道沿いで茶葉を摘む女性たちの姿も見受けるようになった。ケリチョーの高原地帯に入ったのである。ケリチョーはケニアのかつての宗主国イギリスのブルックボンド・ティーの産地である。その街に寄りスーパーマーケットを見つけ、日本への土産のつもりで見知らぬブランドのティーバッグを買った。これを後で飲むと、味が今一つ劣る。途上国の人々が良質のものを輸出に回し、自分たちは二級品で甘んじていることを知ったのは、それから間もなくのことだった。

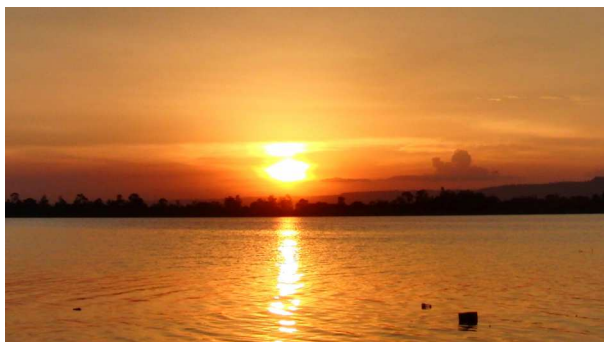


ケリチョーの茶畑

ケリチョーの街で、人懐こい子供たちに出会った。この旅人に向かって、しきりに「ニンジャ、ニンジャ！」を連呼する。彼らがさす方向を見ると、映画館の上にアメリカ製ニンジャ映

画のスター「ショー・コスギ」の看板が掲げてあった。確かに「ニンジャ」は今や日本人の代名詞になった観がある。それに苦笑しながらも、可愛くそして底抜けに明るい少年たちに感謝して、一枚写真をとらせてもらった。

ケリチョーの街からは、道は再び下り坂となり、ゆるいが幾重にも続くカーブの道となる。日が傾いて来たというのに、外気はむっとするほど暑く、300 km近く走った私はかなり疲れてきていた。目的地のヴィクトリア湖畔のキスムは海拔 1200m であり、ナイロビと比べ 600m も低い。ここで一気に高度を下げたのだ。降り立った広い谷は、キスムに向かって西側へ続いている。その気温のせいなのか、大地はこれまでに干いており、乾ききった草の原が続いていた。そこを1時間近く走り、急に緑が見えるようになると、そのまま街に入って来た。



ヴィクトリア湖に沈む夕陽

予約を入れておいたのは、南側の高台にあるその名も『サンセット・ホテル』。湖を右に見ながら間もなくそこにたどり着いた。目の前に広がるのはアフリカ最大のヴィクトリア湖。そのリゾート・ホテルの庭に出て、坂を下って湖岸へと出てみた。ところが、湖岸と言っても遊歩道もなく岸辺は藻に洗われて、水も澄んでいとは言えなかった。第一、この辺りには住血吸虫が住むと聞いている。湖は遠目からが良いと納得して引き上げた。ヴィクトリア湖はキスムの辺りで深く東に入り込み、今実際眺めている湖面はその入り江なのだが、その湖への出口の向こうに日は沈む。一日が終わり、今日もア

フリカの大地を焦がした大きな赤い夕陽が、湖に吸い込まれるように没していく。私はその光景を心行くまで見入っていた。

ヴィクトリア湖からの道

ホテルの夕食は色とりどりに盛り付けられたビュッフェ形式のディナーだった。ところが昼間の日射にやられたのか、体調が思わしくない。案の定お腹を下してしまった。その上、早々と引き上げてベッドに入ったものの、そこはエアコンも効かずやたらと暑い。考えてみると、西側に面してしかも最上階のこの部屋は、午後からずーっと壁と天井に輻射熱をため込んでいたのだ。明け方近くまで苦しい夜が続いた。それでもどこかで眠ったらしく、翌朝の目覚めは快適だった。朝食後、早々とチェックアウトして昨日来た道を今日は東南へと引き返す。

途中ナクルの街で、その南に位置するナクル湖国立公園に寄り道した。白人のレインジャーがいるゲートをくぐると、間もなく木の間越しにソーダ性の塩水を湛えた湖が見えて来た。ナイヴァシャ湖を一回り小さくした大きさである。この目玉は、何といてもその湖水に群れるフラミンゴだ。ガイドには決まって、多い時には湖をピンクに染めると書いてある。実際のフラミンゴは、干しあがった遠浅の岸辺のはるか彼方に群れていて数千羽程度と思われた。しかも、この岸辺で降りて行っても靴が泥土にぬかってしまいとても近くまでは接近できない。と言うわけで、フラミンゴ見物は東京の動物園の方がよかったかもしれない。ペリカンが群れるというポイントでも、季節外れなのか一羽とて見えなかった。それでも東岸の林の道では、羚羊類の仲間ウォーターバックに多数出会ったし、樹上に戯れるサヴァンナ＝モンキーはけたたましい声を立てて通り過ぎて行った。

途中、ナイヴァシャの街で昼にして、昨日と変わらぬケーキをぱくついた。それにしても食堂の造りは粗末で、テーブルも使い古しを大事



ナクル湖のフラミンゴの群れ

に使っている風で、その雰囲気は 20 年以上も前の日本の田舎にタイムスリップしたようだった。こうして旅も終わりを迎え、ナイロビの街に近づくと、この都会に向かって道が下っているせいか、初めてサヴァンナの広がりの中に高層ビルを屹立させるその都会の全貌が見えて来た。ナイロビの歴史は、いまだイギリス人が手を入れてから百年と言う。まだ若い都市なのだ。宵闇が近づく中、車を飛ばして市内のレンタカー返却店へと急いだ。

そのサヴァンナ・ツアーの前に 17 時ぎりぎりに着くと、あいにくレンタカー担当の青年の姿は見えず、どうしたものか困ってしまった。幸い旅行部門の人が残っていたので事情を話すと、アフリカの肝っ玉母さんといった風貌のこの女性は、心配するなど明るく対応してくれた。しばらくして現れたその青年に指示を与えると、大丈夫と言って肩をポンとたたいてくれた。この明るさがアフリカなのだ、つくづくその心意気に感心したものだ。

ケニアの人々の希望

タクシーで O 氏宅へと帰宅すると、疲れただろうがケニア在住の人達と話す機会があるから行こうと誘われた。出かけたのは、高級住宅地にあるコンドミニアム(日本で言うマンション)の一面にお住いの JICA(国際協力事業団) 職員の E 氏宅だった。日本から来る時一緒になったその母と妹さんとも、ここで再会した。他に

JICA から派遣された女性の獣医 I さんと言った顔ぶれだった。ナイロビで旅行者以外の邦人を探すと、大抵こんな人々が集まるという。話は、この土地の居心地の良さ。一方で自分が抱える仕事の大変さなど、様々だった。女医の I さんは、ケニアを拠点に畜牛の風土病を予防するため、注射液をもって飛び回っているのだそう。現地では宿泊施設があるとは限らず、満天の星を見上げながら野宿したこともあるという。O 氏は、西方のルワンダやウガンダから流入する難民を政治難民と認定するか否か、対応に追われていた。先日はウガンダとの国境で危うく銃で撃たれそうになったと言う。日本では聞くことができぬ話ばかりだった。

夜遅くに帰り、翌日の大晦日の朝はさすがに寝坊させてもらった。主が出かけた後しばらくして、お手伝いさんのレイチェルがやって来た。彼女は、昨日いたキスムに近い田舎から出て来て、故郷の留守家族に仕送りしているという。まだ三歳児の幼いルーズを伴っていて、日中この邸宅はルーズの格好の遊び場なのだという。実際この日一日、私はルーズと戯れることになった。夜は夜で、警備員のクリスに会った。学生だったが今は休学中だと言う彼は、庭に建てた小さい交番のような小屋で寝ずの番として過ごす。

こうした人たちを見ると、途上国の現実が少しずつ分かって来る。彼らの帰る住まいは、ナイロビの東、電気もないスラムの粗末な家屋の中にある。人口過剰で田舎に余裕がないので、この目映い都会へと出てくる。しかし、英語も達者とは言えない人たちも多く、ありつく仕事はたかが知れている。その上、仕事が見つからないことも多いから、窃盗などの犯罪が絶えない。滞在中はこのスラムで火事があったりもした。国内でのそして世界との貧富の格差がいつ解消されるともわからずに、彼らはかつかつの生活を続けているのだ。それでも希望はある。ケニアの人々は、貧しくとも教育熱心だ。レイ

チェルがルイズを連れて来たのも、都会で教育を受けさせる機会を与えてやりたいからだと言う。私には、こうしう人々もこの地球に共存しているのだという感慨が残った・・・。

正月にケニアから帰国した時、留守宅に届いた年賀状の返事に、私はこう書いた。

「ナイロビは本当に良い所でした。庭の喬木が風にそよぎ、時折ドスンと落ちてくるものは、アボガドの実でした。アフリカの人達は優しく、底抜けに明るかった。私はここが好きになりました」と・・・。

了